

膀胱に発生した腺腫から腺癌へと進行したと考えられる膀胱癌の1例

○櫻井真琴 井浦宏 藤崎和仁 三橋涼子 窪奈々子 窪澤仁（千葉市立青葉病院）

【はじめに】膀胱の粘膜は、尿路上皮で被覆されているが、同部位から腺様構造を示す病変が稀に発生することが知られている。また、腺腫の発生、さらには腺腫から腺癌の発生も知られている。今回我々は、膀胱に発生した腺腫から腺癌へと進行したと考えられる膀胱癌の症例を経験したので報告する。

【症例】49歳男性、血尿、排尿時痛、尿中にゼリー状物質混入にて、当院受診。腹部CTにて、膀胱を圧迫する病変を認め、粘液を産生する腫瘍が疑われた。大腸には悪性腫瘍は認められず、尿細胞診は陰性であった。手術所見では、腫瘍は膀胱の左後壁にあり、尿管との連続はなく尿管癌は否定的と考えられた。

【肉眼的所見】検体は部分切除された膀胱左後壁4.5×3.3×2.8 cm大と膀胱に連続した嚢胞性病変12×8.5 cmである。膀胱壁に割を入れると、膀胱壁全体を占めるように白色、充実性の結節性病変を認め、多数の粘液性の結節が嚢胞へと連続して見られた。壁外の嚢胞は単房性で、内容は粘液であった。

【組織学的所見】膀胱粘膜の一部に、大腸の上皮に類似した粘液産生を示す、上皮の絨毛状増殖からなる腺腫を認めた。腺腫から連続性に異型の増加した上皮が腺管状に増殖して膀胱壁内を浸潤性に進展するとともに、多数の粘液湖を形成していた。以上の所見から、腺腫の一部が癌化し、管状腺癌～粘液性腺癌として浸潤し、膀胱壁外に粘液を容れた嚢胞を形成したと考えられた。

【まとめ】今回、腺腫と腺癌が併存した稀な原発性膀胱腺癌を経験した。本症例より、腺腫が癌の発生に関与しており、腺腫が悪性転化する可能性が示唆された。したがって、腺腫と診断された症例でも癌が存在している可能性もあり、癌の有無の確認が必要と考えられた。連絡先 043-227-1131(内線 2234)